

ゴッホの「ひまわり」



1992年8月25日

信天翁

伊室 一 義

★ はじめに

人は一枚の絵の前に立ったとき様々な感懐を抱くわけですが、もしその絵を描いた人が「どういう気持ちでその絵を描いたのか？」という絵解きができますと、観る楽しみも倍加されるものです。有り難いことに、ゴッホは弟テオ宛に丁寧な手紙を沢山残してくれましたので、私達はこれを道標にゴッホの絵に近付くことが出来ます。そしてその手紙のなかに、こんな言葉を見つけて私は感激しました。「画家は死んで墓の下に埋められていても、絵を通して次の世代、あるいはその後の数世代に語り掛ける・・・・・・」ゴッホは「花咲ける果樹園」「跳ね橋」「収穫の風景」「夜のカフェテラス」「星月夜ほしづくよ」「星月夜の糸杉のある道」や「積み藁」「鳥の群れ飛ぶ麦畑」で何を語りたかったのでしょうか？そしてあの「ひまわり」は一体、どんなことを語っているのでしょうか？

幸運にも恵まれて、アルル時代の「ひまわり」の1点が日本にやって参りました。1987年7月、ロンドンから遙々到着したこの絵を初めて眼の前にして、私達はその旅路の無事を喜ぶと共に、「ひまわり」の輝きに改めて感嘆の声を挙げました。それから、お客様をご案内して私は250回以上もこの名画に接してきたのでしょうか。ところが不思議なことに何回眺めてもこの絵は飽きるということがありません。見れば見るほど新鮮で次から次へと発見や想像が湧いてきて、いつの間にか私は「ひまわり」との対話から離れられなくなったのです。専門家のお話を伺ったり、ゴッホの書簡集を読んだりしながら、私なりの「ひまわり」論を纏めてみましたので、皆様方のご鑑賞の参考にして頂けたら幸せと存じます。

一昨年(1990年)はゴッホ没後100年目で、オランダにおいて回顧展が開催されたのですが、主催者が「エミール・ベルナールに捧げる」と述べたこの展覧会には、恐らく空前絶後といわれる質と量のゴッホの名作が世界中から集められました。ここでゴッホのファン達は「果樹園」「跳ね橋」「寝室」「ジヌー夫人像」など、同じモチーフで色彩の異なる名作を比較鑑賞する贅沢を満喫させて貰いましたが、壁面に何枚も並んだ力作の相乗効果と、微妙な色彩の使い分けによる「美の世界」の感興に、しばし時の経過も忘れる思いでした。しかしこの回顧展に展示されたアルル時代の「ひまわり」は残念ながらアムステルダムの1点だけでした。どこの美術館でも「ひまわり」は留守には出来なかったということでしょうか。

1. ゴッホの「ひまわり」は何点？

ゴッホはパリ時代に「ひまわり」の絵を5点、アルル時代に7点制作しているが、パリ時代とアルル時代とでは明らかに絵の調子が違う。パリ時代の「ひまわり」はやや萎びた大きな花がまるで人の顔のようで、タッチは激しく色調はやや暗く、この時代のゴッホの生活を反映しているかに見える。

恋と喧噪と酒に沈んでいたゴッホにアルル行きを薦めたのはあのロートレックであった。「アルルには太陽がある。光がある。美人がいる・・・・・・」1888年2月、アルルに到着したゴッホは期待通りの明るい南仏の町に歓喜する。何とこのときゴッホは「ここはまるで日本のようだ！」と叫んでいるのである。日本に来たこともないのにどうしてこんな台詞が飛び出したのだろうか？・・・その謎解きをすれば、彼の鋭い感覚が浮世絵を通じて「日本」を感じ取っていたということである。そしてその正確さは間もなく取り掛る「花咲ける果樹園」の連作を見れば一目瞭然であり、またアルル郊外の田園風景「収穫の風景」の絵はまるで日本の農村そのものである。

しかしなんといってもアルルの明るさは夏に如くものはあるまい。夏といえば南仏の太陽、太陽といえばこれを目一杯吸収した「ひまわり」がある。太陽と光を求めたゴッホが「ひまわり」に立ち向ったのは、ごく自然な成り行きだったと言えるかも知れない。アルルの「ひまわり」は大きくて明るい。



(収穫の風景)

2. 安田火災の「ひまわり」は何故1月末に描かれたか？

1888年8月、ゴッホは靈感を得て風景の制作を中止し、静物に向かった。あの「ひまわり」である。敬愛するゴーギャンの一日も早いアルルへの到着を願い、パリのレストランにあった大きな花の装飾画を思い出して、住まい兼アトリエの「黄色い家」を「ひまわり」で飾ろうと考えた。

「僕はブイヤベース（魚や貝の寄せ鍋料理）を食べるマルセーユ人の熱心さで絵を描くのに熱中している。大きなひまわりの絵だ」と弟テオに当てた手紙にあるように、ゴッホは12枚の「ひまわり」を描く計画であったが花のシーズンは短く、4枚で中断している。10月23日には待ちに待ったポール・ゴーギャンがアルルに到着し、夢に描いた芸術家共同体（ゴッホとゴーギャンが絵の制作に専念し、テオがこれを売りさばいて金を送る）の建設に一步を踏み出したが、次第にゴーギャンとの意見が合わなくなって12月末には不幸な耳切り事件が発生、ゴーギャンはパリへ去る。

1月7日にアルル市民病院を退院したゴッホは、天候のこともあり、専ら室内に留まって制作に精を出す。「レイ医師の像」「鯨」「スケッチ板のある静物」「自画像」などである。1月23日付けの弟テオへの手紙でゴッホは弟のやや悲観的な考えに反論し、我々の制作活動は後日必ず報われるときが来ると力説している。そのためには「今は絵を売ることよりも良い絵をストックすることが大切である」と強調し、1月24日から28日までの間に、12輪の「ひまわり」（フィラデルフィア美術館蔵）と14輪の「ひまわり」2点（アムステルダムゴッホ美術館及び安田火災東郷青児美術館蔵）を仕上げているが、これは写生ではなく夏場に描いた絵のコピーであるから、色彩に一段と

工夫が凝らされ正に色彩画家の^{コロニスト}面目躍如たるものがある。それにしても、僅か5日の間に40号の「ひまわり」を3点、他に同じ大きさのルーラン夫人の肖像画を2点描き上げたのであるから、その集中力たるやただただ驚嘆するばかりである。



（アルル市民病院）

3. 何故サインがないのか？

ポール・ゴーギャンがアルルに到着したとき、待っていたゴッホの「ひまわり」は彼に大きな感動を与えた。ゴッホよりは5才歳上で船員や株式仲買人を経験し、辛辣な批評家でもあったゴーギャンは、仲間のリーダー的存在を自負しており、ゴッホの画風には必ずしも高い評価を与えていなかったが、この「ひまわり」は別格で、「この絵には力がある」と見抜いていた。それは、わざわざ「ひまわり」を描くゴッホを想像によって描いているのを見ても分かる。不幸な耳切り事件が起こったあと、パリへ去ったゴーギャンに対して些かゴッホも気分を壊していたらしいが、やがて元通りにゴーギャンに対する敬愛の気持ちが復活し、1月23日付けの手紙では次のように語っている。

「……ゴーギャンにひまわりの絵を1点やれば喜ぶだろうから、何とかして喜ばせてやりたいと思う。……この絵は人目を引くだろうが、僕は君のために、君と妻とただ二人のために取っておくことを薦めたい。これは長く見ていると感じが変わり、豊かさが出てくる絵だ。それにゴーギャンはこの絵が格別好きだ。彼はこう言ったものだ。これこそ花だと」

このあとゴッホは「ひまわり」の模写にとりかかるが、3点のうち最後の14輪の「ひまわり」はゴーギャンに提供しても良いという気持ちで描いたと思われる。「ひまわり」を愛しこれを欲しがっていた畏友ゴーギャンにプレゼントする絵に、Vincentのサインを入れるには些か抵抗を感じたに違いない。安田火災美術館収蔵の「ひまわり」の壺の部分にはサインはなく、サインは折り込まれたキャンバスの余白にある。ゴッホとしてはゴーギャンとの絵の交換を念頭に置きながらも、弟への手紙にもあるように、テオが気に入れば「手許に置いてもいいよ」という気持ちであった。

5月になって「ひまわり」は他の作品と共にパリのテオに届けられた。彼は「ひまわり」の素晴らしさに感嘆しそれを自宅の暖炉の上に飾った。次々とパリに送られたゴッホの作品は売れず、テオは収容場所にも困ってタンギー爺さん（画材商）の屋根裏にも預けたほどだったので、彼が「ひまわり」を家の中心に飾ったというのは、如何にこの絵に惚れ込んでいたかを示す何よりの証拠である。そしてゴーギャンに実際に提供されたのはルーラン夫人の肖像画「揺籃を揺する女」であった。



4. 何故赤い点がつけられたのか？

1889年5月25日付けの弟テオへの手紙で、ゴッホは下図のようなスケッチを入れてこんな説明をしている。



「・・・たとえば「揺籃を揺する女」を中央に右と左に「ひまわり」2点をおけば、三双一曲になることもついでに心得て置いて欲しい。そうすれば、中央の黄色とオレンジの色調が隣合った両翼の黄色のために一層輝きを増す。それが船室の奥に掛ける装飾画を意図して描いたものだという事が分かるだろう。又そうすれば、画格がぐんと増すから仕上げの簡潔さがいかにも生きてくる。中央の額縁は赤にして、「ひまわり」の2点はそれに合うように細縁の枠をつける必要がある」

ここでゴッホはルーラン夫人の肖像画に、何故赤の額縁を弟に指示したのか？の疑問が生じるが、これは明らかに浮世絵の影響である。オランダ時代から既にゴッホは浮世絵にひかれていたが、パリ時代にはそのコレクションの中から広重の「千住大橋の雨」や「花咲く梅の木」を模写している。この絵がたまたま赤い細縁に納められていたと思われるが、これに魅力を感じていたゴッホはその赤い額縁を含めて模写しているところを注目したい。

ゴッホはパリで開かれるアンデバンダン展へ出展する3点セットとして、入院中色々とお世話になったルーラン夫人の肖像画を赤い額縁に入れ、これを両側から燭台に見立てた「ひまわり」で照らすことを考えたのである。向かって右側の12輪の「ひまわり」の右上方に赤い部分があり、向かって左側の14輪の「ひまわり」には左やや下方に赤い部分がある。これらの赤はルーラン夫人像の赤の背景や赤い額縁と調和するするように、ゴッホが構成したものだろう。なお、これら40号

の大作5点を5日間に完成するためには、5枚のキャンバスを平行に並べ、効率的な絵の具の使い方ですピードアップを図ったものと推測されるが、まず3点セットの作品を仕上げた後、ゴーギャンに提供する「ひまわり」の前に立ったとき、彼の右手には赤い絵の具のついた絵筆が握られていたのだろう。そしてゴッホは究極の14輪の「ひまわり」のほぼ中央にルビーのような輝く赤を入れたのであった。

「画竜点睛」という言葉がある。竜を描いて最後に睛ひとみを描き入れた途端、天に舞い上がったという故事であるが、この赤い点がまた実に良く効いている。

ゴッホがこの「ひまわり」を完成後妹のヴィルヘル・ミーナへの手紙に「またひな鄙びたひまわりの絵には感謝の気持ちが出ていても、結局僕の絵は不安の絶叫のようだ、という今の気持ちを聞いて貰いたい気がする」と書いているが、ここでいう感謝の気持ちとはアルルにおいて親交を続けた数少ない友人のルーラン及びその家族への感謝であり、同時に芸術家共同体構想の行き詰まりとアルル市民が彼に対して示した偏見（狂人扱い）に関する不安の気持ちを妹に述べたかったのであろう。今日では定説となりつつある「ゴッホはメニエール病」説によれば、かの耳切り事件も眩暈めまいと激痛から起こった衝動であり、決して決して精神病などではなかった。それは、この時期に出された彼の冷静な手紙や、「ひまわり」の絵に注がれた集中力を見れば納得できることである。

ゴッホは「ひまわり」と「ルーラン夫人」の5点を制作後、2月9日には再び入院したが、それは恐らく徹夜の制作が祟って、メニエール病が再発したのであろう。アルルの市民は、この眼付きの鋭い北欧人を精神病患者と決めつけ、ゴッホを隔離するよう市長に陳情し、彼はもどかしさと不安に包まれてサン・レミ精神病院に入院せざるを得なかったのである。



(サン・レミ病院)

5. ゴッホの愛した色彩

アルル時代の「ひまわり」の色彩に拘って少しばかり追いかけてみよう。最初の3輪は（ヨーロッパ、個人蔵）グリーンの壺にグリーンのバック、これはひまわりとの調和を狙った穏やかな色調で、ルーランの長男の肖像画のバックと一脈相通ずるものがある。次の「ひまわり」（戦災により芦屋で焼失）の背景はなんとロイヤル・ブルーだ。この色は「黄色い家」の空の色を連想させる。確かにこの色をバックにすると、一段とひまわりを浮き立たせることになるが、やや上方が重くなるためであろう、ゴッホは切り花を壺の前においてバランスを保っている。そして、3番目12輪の「ひまわり」（ミュンヘン、ノイエ・ピナコテーク蔵）の背景は清流を思わせるような水色だ。これ以降に登場するひまわりの壺はすべて黄色となるが、これはゴッホの夢でもあった芸術家共同体の「黄色い家」と無関係ではないだろう。14輪の「ひまわり」（ロンドン、ナショナルギャラリー蔵）のバックは明色の黄色となって、主題のひまわりはむしろシルエット風に浮かび上がっている。1月になって描かれた12輪と14輪の「ひまわり」は燭台の働きを目指したので、ひまわりの黄は更に明色が加わる。そして究極の「ひまわり」は黄色のテーブル、黄色の壺、やや青みを帯びた黄色のバックに、主題のひまわりは明色の黄となって全く黄色のオンパレードである。大胆な黄色のシンフォニーが成功して、この絵は太陽のような輝きを放つことになった。彼は弟への手紙でこう書いている。「ところで、黄金を溶かすためには十分加熱する必要があるように、この花のトーンは……誰にでもいきなり出せるものではなく、一人間全体のエネルギーと集中力を必要とするのだ」



1890年7月29日、ゴッホは37才でこの世を去った。エミール・ベルナールはその時の模様をこう書いている。「棺には一枚の白い布が掛けられそして花が積まれた。彼があれほど愛していたひまわり、黄色いダリヤ、黄色い花が溢れていた……」

（アルルのひまわり畠）

★おわりに

ゴッホの死後、オワーズの旅館ラヴー亭の一室に安置されたお棺の周りには、ベルナールの発案によってゴッホの作品が飾られました。パリから駆けつけた彼の仲間達は「オワーズ川岸のボート」「医師ガシェの肖像」「オヴェールの教会」「ドービニーの庭」「荒天に鳥の群れ飛ぶ麦畑」などの傑作の並ぶ壮観にアッと息を飲んだのでした。このときテオはベルナールに対し、後日兄の遺作展の開催を依頼したのですが、6ヵ月後テオ自身が急逝したため彼は夢に描いていたゴッホの遺作展を見ることは出来ませんでした。

テオの死後エミール・ベルナールは遺作展の開催準備のため奔走しましたが、ポール・ゴーギャンの次のアドバイスによって中止することになったのです。

「印象派の画家は世の中に認められなくて苦しい思いをしている。ゴッホの自殺後、彼を狂人扱いした人々は印象派全体をも狂人扱いしようとしているのだ。今は絶対に彼の遺作展は開くべきではない」

それから100年経った1990年の3月30日（誕生日）から7月29日（命日）まで、かつてベルナールが開催しようとして出来なかったゴッホの回顧展はオランダにおいて盛大に開催されました。主催者が「ベルナールに捧げる」と銘うったのは、実はこのような事情があったからです。世界中から集まったゴッホファンの熱狂ぶりをもし知ったら、ゴッホやベルナールは何と云って喜んだでしようか？

パリ郊外シュール・オヴェール・オワーズの共同墓地には、フィンセントとテオドールのゴッホ兄弟が蔦の布団にくるまって仲良く眠っています。



フィンセント・ファン・ゴッホの父は牧師、母は装丁師の娘、三人の伯父はいずれも画商でしたから、彼の血の中には、「聖」「手仕事」「美」のセンスが流れていました。しかし彼はその内面に宿していた情念が余りにも強烈なものであったため、それを他の人々に伝える方法を見失っていました。その意味では世渡りの下手な人であったといえます。彼は世間に調和、もしくは適合しない自分に絶望したとき「絵を描いていくより他に生きる道がない」と思って、画家になったのでした。初めから画家を志していた他の人達と大きく違うところです。彼が画家として活動したのは僅かに10年間で、後世に残る名作は主として最後の3年間に生み出されました。「ひまわり」は彼が最も充実した時期に内面のマグマが噴出して出来上がった絵ではないかと私は思います。

卓球の世界チャンピオンになられた荻村伊智朗さんは、グリップを変えて極度のスランプに陥ったとき、吉祥寺の書店で見かけたゴッホの「ひまわり」が激励してくれたお蔭で立ち直る事が出来たと述懐しておられますし、岸田劉生さんはゴッホの絵を見て画家になる事を決心なさったと言われていますから、彼の絵がこの百年間に沢山の人々に大きな影響を与えてきたのは紛れもない事実です。

気持ちを一ぱりと明るくしたいときは、42階に出かけて行って「ひまわり」の前に立てばよいのです。「ひまわり」は不思議な語りかけで私達を勇気づけてくれます。



以 上